青蘿発句注解　二

富田志津子

はじめに

本稿は、「青蘿発句注解　一」（『姫路獨協大学外国語学部紀要』三〇、二〇一七年二月）に続くものである。栗の本青蘿が生涯に詠んだ発句を、年代のわかるものは古い順にとりあげ、注解している。前稿は、もっとも古いもの、つまり青蘿の浪人、流浪、加古川定着から、明和五年の蛸壺塚建立までをとりあげた。今回は、それに続いて、明和五年から安永二年頃までに詠まれたものをとりあげる。

明和初年頃、加古川に三眺庵を開いて宗匠の生活をはじめた青蘿であった（富田志津子「栗の本青蘿年譜稿」『大阪大学医療技術短期大学部研究紀要　人文科学篇』二五、一九九三年一二月）。その頃、蝶夢と知り合い、傾倒し、その影響下にあったと思われる（「青羅と蝶夢」関西大学『国文学』一〇二、二〇一八年三月）。そのため、今回とりあげる時期の青蘿の俳諧活動は、蝶夢に関わるものが多い。また、樗良との交流も始まった。

明和九年七月に蘿来が没した。青蘿にとって、非常に親しい門人であった。青蘿は、蘿来の死を悼み、追悼句を詠み、追善集の序文を認めた。一周忌には、蝶夢を京に訪ね、蘿来追善歌仙を巻いている（蘿来一周忌追善集『秋しぐれ』、後出）。

今回は、蝶夢との関わり、樗良との交流、蘿来の死といった出来事を視野に入れて、その頃に詠まれた青蘿の発句をみていきたい。（漢字は現行のものにあらため、濁点を加えた）

一

青蘿は、明和三年に粟津義仲寺を訪れて時雨会に参加し、芭蕉追善俳諧に一座した。この時、蝶夢と出会ったと思われる（前掲「青羅と蝶夢」）。以後、しばしば時雨会に出座、あるいは『しぐれ会』に投句している。

次の句は、明和五年『しぐれ会』の「文通奉納」に掲載されているもの。青蘿はこの年、義仲寺の時雨会には参加せず、発句の投句だけにとどめている。投句の季題はすべて「時雨」である。

① 寺〻は鐘つき出すや夕しぐれ　　播磨　山李坊

冬（時雨）　出典　『しぐれ会』（蝶夢編、明和五年刊）（『時雨會集成』義仲寺編、平成五年刊、所収）

【訳】冬の夕暮、時雨が降っている。静かな雨は、辺り一面を静寂でつつんでいるようだ。時は暮れ六つ。やがて、近くの寺々からこの時雨の静けさを破って、鐘の声が聞こえてくるだろう。

【注】時雨の静かさと鐘の音を詠む。其角に「あれ聞けと時雨来る夜の鐘の声」（『猿蓑』）という句がある。それは、鐘の声が、時雨の音を聴け、と言う。青蘿の句は、時雨が、鐘の声を聴け、と言っている。

墨直会は、京、東山双林寺で支考が始めた行事であった。芭蕉塚の碑面の刻字に墨を指し直す。また句会を催し『墨直し』を刊行する。年中行事化して、正徳元年から文化文政期まで行われていた。青蘿は、明和五年の『墨直し』に投句している。この時、蝶夢が主催していたからであろう。

② 紅梅やとくれ暮て鳥の声　　播磨　山李坊

春（紅梅）　出典　『戊子墨直し』（蝶夢編、明和五年刊）（田中道雄「翻刻・蝶夢編『墨直し』六種」『佐賀大学教養部研究紀要』二八、一九九六年三月）所収

【訳】紅梅が美しく咲きにおう。その美しさに惹かれて愛でていたが、日が傾くころ、ようやく鳥の声に気がついた。

【注】「鳥の声」は、やはり鶯だろう。視覚と聴覚でとらえた句である。日盛りは、紅梅のあでやかさにばかり目を奪われたが、日没頃になって、ようやく鳥の声にも気がついた、という。日は暮れ果ててはいない。薄暮を「一くれ暮て」と表現した。

この頃の青蘿は、もっぱら蝶夢の影響下にある。時雨会や墨直会への出席、投句のみならず、一般の俳書への投句も、蝶夢に関わるものが多い。次の句が載る『はちたたき』は、蝶夢編の俳書である。自序によると、一夜、京中川の蝶夢の庵に、文下らが集い鉢叩きを聞き、九吟歌仙を巻いた。その歌仙を中心に、さらに鉢叩きを詠み込んだ発句を集めて一集としたもの。発句には、芭蕉ら古人の句と、青蘿ら今人の句が混じる。

③ 鉢敲老のちからの有たけか　　播磨　山李坊

冬（鉢叩き）　出典　『はちたたき』（蝶夢編、明和五年自序）、（『蝶夢全集』（田中道雄ら編、二〇一三年刊、所収）

【訳】寒夜に鉢叩きの声が聞こえる。冷たい空気を破るその声と鉦の音は、おそらく老いた鉢叩きのありたけの力をふりしぼったものだろう。

【注】「鉢叩き」は寒念仏の一種で、空也僧が十一月十三日の空也忌から四十八日間、毎夜洛中洛外を念仏を唱えながら歩くもの。寒さに対抗するように打つ鉦の音の激しさ、張り上げる念仏の声などを「老のちからのありたけ」と表現した。

青蘿は、明和六年三月十二日、東山双林寺の墨直会に参加し、追善俳諧に一座した。蝶夢主催であった。この時、蘿来ら門人四人を連れている。④の発句は、『己丑墨直し』の「一座捻香」の巻頭に載るもの。「文通奉納」には、門人の布舟、雨人、李雨らの句が載り、栗の本の門人が充実してきたことがわかる。連句は、「明和六巳年三月十二日双林寺閑阿弥亭興行」で、青蘿は二十七番目に句を詠み、以下、蘿来、普山、虫臂ら、門人が続く。

④ 桜から通ふあかりや墨直し　　播州鹿児川　山李坊

春（桜）　出典　『己丑墨直し』（蝶夢編、明和六年刊、前掲「翻刻・蝶夢編『墨直し』六種」所収）

【訳】墨直しの行事の場、芭蕉塚の碑面に墨を指そうとすると、満開の桜を通して光が降り注ぐ。
【注】墨直しの場面を詠んだもの。毎年三月十二日に行われるので桜が満開である。

この頃から樗良との関わりも出て来る（富田志津子「『骨書』七歌仙」『俳文学報』五二、二〇一八年一〇月）。次の句が入る、『まことの葉』は樗良系俳書である。明和六年にあった伊勢遷宮の祝賀吟を集めたもので、諸家の四季発句も収めており、青蘿の句は「四季之吟混雑」に入る。明和八年に、青蘿は伊勢参宮をし、その時に樗良を訪ねている。しかし樗良は留主で、門人左竹らと会い唱和した（茂木秀一郎「青蘿の伊勢訪問の時期他」『ひむろ』一九三八年一一月）。明和六年の時点では、まだ青蘿・樗良の直接の交流はなかったと思われる。『まことの葉』は佐竹（許適）編。

⑤　立つも我座スも我なり秋のくれ　　播州鹿児川　山李坊
秋（秋の暮）　出典『まことの葉』（許適編、明和六年刊）、
【訳】秋の暮、立っても座っても、どう眺めても己れは独りである。
【注】「秋の暮」は、芭蕉の有名な句「この道や行く人なしに秋の暮」（『其便』）がある。晩秋の寂寥感と自己の孤独感を詠んだ絶唱といえる。青蘿の句も、晩秋という季節の中で独り、立ちまた座る己れの孤独を見ている。

青蘿は、明和七年三月、門人布舟と、京の墨直会に出座するべく高砂の浦を船出した。しかし、風が強く舟が遅れて俳諧に一座できなかった。そのため後日、双林寺で後宴俳諧の連句を巻いた。布舟発句、蝶夢脇、青蘿は第三を詠む。⑥の発句は、『庚寅墨直し』の「余興探題」に入るもの。そこには、後宴俳諧の連衆の発句が並ぶ。ほかに、「文通奉納」に、雨人、蘿来、李雨、野上ら林田の青蘿門人の句がみえる。

⑥　西行庵の落花
花の本にやどる甲斐なく散る日かな　　播磨　山李坊
春（花）　出典　『庚寅墨直し』（蝶夢編、明和七年刊）（前掲「翻刻・蝶夢編『墨直し』六種」所収）
【訳】西行と同じように、西行庵の花のもとに宿ってみたが、今日は折から落花するばかり、愛でる余裕もない。
【注】墨直会の行われる双林寺に「西行庵」があった。西行が双林寺塔頭に止宿したとされ、頓阿法師が西行を慕って庵を結んだ、ともされる。芭蕉も「西行庵」に泊まったという。青蘿の発句は、桜のもとの西行庵を詠む。西行の「ねがはくは花の下にて春死なむ　その如月の望月の頃」（『山家集』）に拠っている。今、西行ゆかりの庵にきている、満開の桜を愛で、西行を偲びたいが、花はさかんに散るばかり。

青蘿はこの墨直会のあと、粟津義仲寺へ足を運んでいる。蝶夢が義仲寺に芭蕉堂を建立し、蕉門三十六人の肖像を掲げた。青蘿は、記念の「明和七庚寅歳三月十五日於粟津生蓮坊興行　芭蕉堂供養一千句巻頭」百韻に、布舟とともに一座している（『施主名録発句集』）。⑦は『施主名録発句集』下巻の「芭蕉堂施主名禄発句集」の巻頭におかれている。青羅が蝶夢に重く見られていたことがわかる。

⑦　子規なくや矢をつく雨の中　　鹿児川　山李
夏（子規）　出典　『施主名録発句集』（蝶夢編、明和七年刊）、『梅の草紙』（後川編、明和八年自序）
【訳】篠突く雨の中、それにも負けずに子規が鳴いている。その声と雨音は、同じく激しい調子で、重なって聞こえる。
【注】激しい雨と時鳥の鳴き声を重ねた。聴覚の句。

次の⑧の発句が出る『古机』は、津軽の四九坊が没して、彼が書き集めてあった全国の俳人の四季発句と、四九坊自身の発句をまとめて、四六庵巴流が編したもの。蝶夢が序文を書いている。青蘿の発句は、門人らの句とともに出ている。

⑧　日あたりへ出して見て居る海鼠哉　播磨鹿児川　山李坊

冬（海鼠）　出典　『古机』（巴流編、明和七年刊）

【訳】子供にとって、海鼠は得体の知れぬ生き物。冬の一日、子供は海鼠を見るのに、冷たい場所から日当たりのよい場所に出して、じっとながめる。海鼠は、音を出すこともなく、静かである。

【注】動かぬ海鼠の静けさ、海鼠の冷たさ、日なたの暖かさが感じられる。五感で感じる感覚を重視した句。

⑨の発句の出る『落葉考』は闌更の俳論書である。青羅は加古川定着以前に金沢へ闌更を訪ねて行き、友好を結んでいる。その縁で、同書に入集しているのだろう。

⑨　見渡せば海又海や秋の暮　播州　山李坊

秋（秋の暮）　出典　『落葉考』（闌更編、明和八年刊）

【訳】秋の夕暮、海をはるかに見渡せば、花も紅葉もなく、ただもう海又海が広がる。

【注】藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり　浦の苫屋の秋の夕暮」（『新古今和歌集』）をふまえる。状況は、定家の和歌と同じである。苫屋から見る秋はただ、海が広がるばかり。

明和八年九月、青羅は伊勢参宮をする。樗良を訪問したが、樗良は旅に出ていて会えなかった（前述）。そのあと同年十月、粟津義仲寺の時雨会に、青羅は門人羅来を伴って一座している。この年の時雨会も蝶夢主催であった。時雨会の連句では十七番目の月の句を詠む。また「出席捻香」の発句は、青羅の句が巻頭を飾る。それが⑩である。さらにその後、青羅は羅来とともに、京中川の蝶夢の五升庵を訪れ、泊まっている（『秋しぐれ』）。

⑩　のこりなく湖水をめぐるしぐれ哉　播磨　山李

冬（時雨）　出典　『しぐれ会』（蝶夢編、明和八年刊）（前掲『時雨會集成』所収）

【訳】琵琶湖に降る時雨。湖の一部に降っていると思ったが、時雨は巡り、結局は琵琶湖一円に降っている。

【注】「時雨がのこりなく湖水をめぐる」が普通の文体だが、時雨を強調した。

次の⑪句が載る『文ぐるま』は、伊勢で白雄が刊行した春興帖。白雄は明和八年京に仮寓した後、伊勢を訪れたのであった。後半の「文通」に蝶夢、諸九尼らとともに当句が入る。

⑪　冬三月門さす寺の落ち葉かな　山李

冬（落ち葉）　出典　『文ぐるま』（明和九年、白雄編）

【訳】冬の三月（みつき）、つまり十月・十一月・十二月の間、山にある寺は、人の訪れもなく、門を閉じたままである。落ち葉は掃かれることもなく、吹きだまりにたまっている。

【注】冬の山寺の寂しさを詠む。「冬三月（ふゆみつき）」は「三冬（さんとう）」を言いかえたもの。「三冬」は、孟冬・仲冬・季冬のことで「潜竜三とうにうづくまって一陽来復の天をまつ」（『曽我物語』）等、古くから使われる語であった。

⑫は『秋かぜの記』所収の句、同書は諸九尼の奥羽行脚の紀行。後半に諸国の俳人の句を収める。重厚の句が巻末で、蝶夢、青羅も入集する。栗の本門人は、羅来ら四人が入集。

⑫　若草にワカ草ほどの嵐かな　山李

春（若草）　出典　『秋かぜの記』（明和九年、諸九尼編）

【訳】初春に若草が顔を出す。そこへ春の嵐が吹くが、若草を揺らすほどのやさしい風であるよ。

【注】「若草」は春浅い頃、新しく生える草。『毛吹草』等の歳時記では、一月のものとする。「嵐」は季なし。

句は「ワカ草ほどの嵐」という表現が眼目である。若草にふさわしい、優しい風のことであろう。

『折つゝじ集』は、文雄らが、豊前国に野坡を迎えて詠んだ野坡門の吟を中心とする。他に、蕉門高弟や、地方俳人の発句も収録している。文雄は、野坡門から、後に樗良門に移った人、明和八年頃没したが、門弟たちが同書を刊行した。青羅の⑬の句が入るのは、樗良との関係からであろう。

⑬　行春は麦にかくれてしまひけり　　播磨　山李

春（行く春）・夏（麦）この句の場合、夏。　出典『折つゝじ集』（明和九年、文雄編）

【訳】春が去った後、夏に麦が実って、取り入れの季節となる。春は、麦畑のどこかに隠れてしまったのだろうか。

【注】「麦」は、歳時記では四月または五月。いずれにせよ、夏の季語で、初夏の頃実り、収穫する。「麦秋」の語も孟夏（『滑稽雑談』）。「行く春」は晩春、春が終わるのを惜しむ気持ちを籠める。春が去ったのち、麦秋を迎え、麦が色づき取り入れ時となるのを、「麦にかくれてしまひけり」と表現している。

次の句が載る『しっぽく題』は、肥前長崎の梅暁の十三回忌集。梅暁は、『しっぽく台』という俳書を編集しようとして果たせず亡くなったので、十三回忌に一字を変えて其勇が出版したもの。「混雑諸国発句」にこの句が入る。蝶夢も入集する。

⑭　賑はしくよき代の人の玉まつり　　播磨加古川　山李

秋（玉まつり）　出典　『しつぽく題』（明和九年、其勇編）

【訳】今日は盂蘭盆、先祖の霊を迎える。よき時代よき一生を生きた先祖もいるだろう。そういう人は、とくに

賑々しく、精霊棚を飾って、祀ってあげたいものだ。

【注】「玉まつり」は、先祖の霊を祀る盂蘭盆の行事で、季節は秋。精霊棚を作り、季節の物などを供えた。供え物は、地方によって異なるが、鬼灯、ふくべ、素麺、団子など様々で、釣燈籠、提灯などを吊す。「賑はしく」は、その精霊棚の賑わいをいう。

明和九年七月十六日、門人蘿来が没した。蘿来は、大庄屋三木雨人の弟で、竜野に住んでいた。風流人で、芭蕉ら有名俳人の短冊を多く所持していたという。大庄屋で多忙だった雨人とは異なり、蘿来は自由だったのだろう。青蘿は、蘿来を各地に同伴した。義仲寺の時雨会や、双林寺の墨直会に、蘿来は青蘿とともに、度々出座している。

羅来が没してまもなく伊勢の樗良が訪ねて来て、百か日に青蘿、半捨坊と三人で追善歌仙を巻いた。一周忌には、青蘿が京の蝶夢を訪れて、加茂川辺で追善の両吟歌仙を巻いている。蘿来の兄の雨人が、一周忌に追善集『秋しぐれ』を刊行した。⑮は、『秋しぐれ』所収の巻頭追善歌仙の発句。⑯⑰⑱⑲は、同書「四季発句」の部所収の春夏秋冬の発句である。

⑮　まことある友うしなひぬ秋の風　　令茶

秋（秋の風）　出典　蘿来追善集『秋しぐれ』（雨人編、安永二年刊）（『俳書文庫』2所収）

【訳】誠実な友人だった。真心で接してきた人が亡くなった。茫然とする自分に、秋の風は冷たく吹きつける。

【注】高弟であり、最も親しかった友人を失った悲嘆が詠まれている。追善歌仙の連衆は、青蘿のほか、雨人、烏木、野上、李雨で、林田の三木家一族である。

⑯　散りしくや菫がうへの山ざくら

春（菫）（山ざくら）　出典　『秋しぐれ』

【訳】満開の山ざくらの下には菫が咲いている。山桜が散ると、菫の花の上に花びらが散り敷いていく。風が吹

くと、山桜の花びらが菫を埋め尽くしてしまう。同じ季節の花ふたつ、どちらの花もよい。

【注】菫は、野原や畑の畦などに自生する。芭蕉が「山路来て何やらゆかし菫草」（『野ざらし紀行』）と詠んで以来、山路にも詠まれるようになった。「山桜」は、本来独立した種類をさすが、山に自生する桜をいうことも少なくない。「みよし野の近道寒し山桜　蕪村」（『自筆句帳』）なども山の桜を詠む。青羅の句は、山路に咲くふたつの花を、上下でとらえた。

⑰　鵜のかゞり暁に消えて水寒し
夏（鵜飼）　出典　『秋しぐれ』

【訳】一晩中燃えていた鵜飼いの篝火が、暁に消えると、川は冷え冷えとして水の寒さが感じられる。

【注】芭蕉の「おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉」（『曠野』）と同意。花やかな鵜飼を、芭蕉は、後には悲しみがやってくる、と詠んだ。青羅の句も同じで、終わった後は寒々しい。

⑱　雑水に月のあかりの栄花哉
秋（月）　出典　『秋しぐれ』

【訳】灯火はなく、月光をあかりとして、雑炊をする。そんな質素な生活だが、自分にとっては悠々自適の栄花なのだ。

【注】「雑水」は「雑炊」、近代では冬の季語だが、近世に季語として使用された例はなく、この句は月が季語で秋の句である。

⑲　山中や時雨日くれてひとり行
冬（時雨）　出典　『秋しぐれ』

【訳】旅の句。山中で日が暮れ、時雨さえ降ってきた。泊まる所は見つからず、ひとり歩き続けるしかない。

【注】「山中」「時雨」「日ぐれ」「ひとり」と、寂しい語を並べている。芭蕉の風雅に似通う。

おわりに

加古川に宗匠として落ち着き、蝶夢と知り合い、その影響下にあった頃の青羅の発句を注解した。樗良や闌更との交流も見えている。高弟羅来に逝かれたのは衝撃であった。

芭蕉の作品の影響が強いことが、青羅発句に感じられる。芭蕉の「山路来て」の菫は、⑯の山桜の下に咲き、「やがて悲しき鵜舟」は、⑰暁に篝火が消える。月明かりで夕食をとる貧居⑱や山中で時雨に遭う一人旅⑲も、芭蕉の俤を彷彿とさせる。この頃は、句の一つ一つに芭蕉を意識していたのではなかっただろうか。

The Notes of Seira's Haikus 2

Shizuko TOMITA

This paper follows "The Notes of Seira's Haikus" (2017).

It takes up Haikus composed by Seira Kurinomoto between 1768 (Meiwa 5th) and 1773 (Annei 2nd).

At that time, Seira lived in Kakogawa and worked vigorously as a master.He was being influenced by Chomu who lived in Kyoto.

This paper shows that his works are associated with the works composed by Basho.